

平成23年度第1回河川工作物アドバイザー会議  
論点整理（全体）

1 サシルイ川のダム改良モニタリングを終了して良いのか？

※魚道改良によってカラフトマス遡上は容易になったが、魚道折り返し部分のプール長が短いことがシロザケ遡上の阻害要因になっている可能性がある。また、シロザケ遡上が年々減っている。モニタリング継続が必要ではないか。

2 流路工、帯工、玉石連結工などについては検証が必要ではないか？

※流路を固定すると産卵環境ができなくなる。これらの工事は当初の目的を達成しているのか、世界自然遺産地域にふさわしい工事だったのか。

3 羅臼川砂防ダム改良工事にもなって上流側の土砂をどう扱うべきか？

※羅臼川はサケの遡上が旺盛である反面、産卵環境は非常に少ないので、流下してくる礫が重要。このため、既に実施されている産卵床と遡上数の調査結果や昨年 12 月に流出した土砂の堆積状況等の調査などを通じた検討が必要。

4 長期モニタリング対象河川にはルシャ川を含めるべきではないか？

※イワウベツ川、ルサ川、ホロベツ川はともに周辺部であり、遺産中心部の河川、特に IUCN も注目しているルシャ川での調査が必要。

5 サケ遡上に関する長期モニタリング手法としてふさわしく、かつ現実的な手法はどのようなものか？

※ IUCN の勧告内容等からみれば、産卵環境収容力と正確な遡上数を把握できる調査手法の採用を検討すべき。ただし、予算上の制約などもあるので、調査間隔を長くするなど簡略化の検討も重要。

※ 17cm 以上のオショロコマは海と川を行き来することからバイオマスを正確に評価するのが難しい。しかし、温暖化の有効な指標でもあることから、およその増減をチェックできるような手法はないか。

6 その他の指摘

(1) 現在、知床半島ではサクラマスの遡上がほとんど確認されていないことから、1960 年代のサクラマス捕獲量データの再確認が必要。

(2) 河川の流量と石礫の粒径は関係があることから、赤イ川やピリカベツ川での石礫変化などについてはもっと深く分析すべき。

(3) 赤イ川の縦断測量は本流合流点よりもさらに下流まで行った方が良い。

(4) チエンベツ川の改良ダムをシロザケがほとんど遡上しない理由について考えた方が良い。

※もともとシロザケの産卵に適した環境がほとんどないのか、あるいは魚道が原因なのか。